「孤往記」

一　迷　走

看護婦に言われるままに仰向けになると、目の前にいまにも落ちてきそうな黄色い固まりがある。とっさに頭を横にずらして避けようとしたが何も落ちて来ない。鼻先で嘲笑(わら)って看護婦が私の頭をベッドの中央に据え直した。瞬きを繰り返し、目を凝らして見るとそれは天井の紙魚(しみ)だった。目が変なのか、気が変なのか。ときどき、目を閉じると黒い世界の向こうに白い引っ掻き傷が見える。そしてそれは、自分自身の姿を凝視するたびに増えていく。だからこそ必要以上に目を開けている。世間だけが見えるように、自分の罪が消えるように。いつか眼球は潤いをなくし、皹(ひび)がはいり、割れて眼窩からぼろぼろと足許に落ちる。その眼の欠片がいつしか一つ一つの独立した眼になって、下から私を蔑むように見上げる。私は思わず大きく首を振った。「動かないで」と看護婦が耳元で言った。左腕に針が刺さる音が聞こえた。唾の飛沫が一つ、私の唇に付いた。看護婦の年齢は母のそれに近い。舌で舐め取ると安煙草の臭いがした。血管から負け犬の血液が音を立てて流れ出ている。全部出しきったら強い人間になれる。何を言われても眉一つ動かさず、何が起こっても微動だにしない死体に。腹を空かすこともない死体に。襟足の綺麗な若い看護婦が振り返って微笑した。病院の明るい方の廊下でのことだ。私は赤くて軟らかそうな唇に見惚れた。私が来院の目的を伝え、経路を聞くまでのほんの一、二分のやすらぎ。応える顔は侮蔑もあらわに歪んだ。それは見る見るうちに彼女を老いさせ、奪い取った血を量るだけの、目の前の女に変えた。努力で開かない扉はない。頑張ることで救われるのは自分だけではないはず。真摯な激励をくれた人たちが、いまは皆、顔を背

けている。優しさを求めて無理遣り顔を覗けば、そこには眼も口もなく、私の腐った五臓を嗅ぐ鼻だけがひくひくと動いていた。汚れた行列が進み、私の前に、前向きだった青春の代価が置かれた。それを手にしたとき、十九歳の高校一年生は事実上死んだ。

「たしかに年上だし、その分よく見えるでしょうし、そうやって一方的に話を整理して、早くまとめたくなるんでしょうけど、僕らは高校一年なんだし、なんていうのかな、迷惑な感じがする。そう、迷惑」

本来なら大学生になる歳で高校に入ってきて、少しぐらい判断力が優っているからといって、それが何なのだ、偉そうな顔をするな。瓜実顔で痩身の男生徒が目の前でそう云っている。誰だか分からない。さっき名前を呼んで発言させたはずなのだが、何時の間にか抽象化が進み、私の頭は男生徒としか把握できなくなっていた。彼は「迷惑」で言葉を切った後も立ち続けていた、まるで「議長が替わるまでこうしています」とでも言うように。教室内が水を打ったようになった。担任教師は腕組みをして、私がこの場をどう捌くのかを興味深げに見ている。里中一弘、二十九歳だという。老け顔のせいか妙に落ち着いてみえる。

私にしてみればどうでもいい問題だった。

『昼休みにパン屋が来る。一度に生徒が殺到するので危険だし計算違いも起こる。その対策や如何』それが話し合われている。ここは小学校か、という白けた気持ちが私にはあった。だいいち、私にはそのパンを買う金がなかった。たまたま持ちあわせがないというのではない。入学してから今日までの二ヵ月、毎日がそうなのだ。惨めであった。机に突っ伏して寝たふりをしたり、校庭に出てボーッと空を見たりして、しかるべき時間がくるのを待った。しかし、どう誤魔化しても、昼飯抜きの私は級友の目に奇異に写る。ある時など「お金ないの？　貸してあげる」と、同じクラスの眩しいほど綺麗な女生徒に硬貨を握らされ、恥ずかし

さを通り越して憤怒を覚えた。
「馬場、桂が坐れないで困ってる。なんとか言ってやってくれないか」と里中が口を開いた。
困るような男なものか。それに満座の中で「迷惑」と侮辱された私への配慮が無い。片手落ちではないか。
目の前で挑戦的な態度に終始している生徒の名前が分かったところで、私は意を決した。
「分かりました、議長を辞めます。後任には桂君を推薦したいと思います」
私に推薦権や指名権があるわけではない。桂への反撃であることは明らかであった。里中は俯いて失望の色を露にし、生徒たちは一斉に騒ぎだした。
壇を降りた私は、自分の机に戻って鞄を取ると、その流れのままに教室を出た。誰一人として止める者はいなかった。
それが原因で向学心を喪失し、高校へ通う意義を見失い、張り詰めていたものが弛緩した。そうかもしれないが、その証拠が欲しかった。だから生まれて初めて血を売った。これで名実共に堕落できる。身軽になれる。自由になれる。そのはずであった。
山手線はなぜか空いていた。いっそ、いつものように混んでいてくれたら、どれほど救われただろう。乗客の目が私を見るときだけ白く光る。そんな気がした。ズボンのポケットの中の五百円札と硬貨数枚が苦痛なほどに重い。¥ルビ（蟀谷、こめかみ）が早鐘のように打ち出した。たかが百八十ＣＣの血を抜いただけで身体が異状を来すとは思えない。調子が狂ったのは心だ。全身に悪寒が走り、震えがきた。
「大丈夫ですか？　真っ青ですよ」と柔かい声がして、若い女性が私の顔を覗き込んだ。あの、病院の廊下で声を掛けた看護婦に似ている。少し開いた唇のむこうの白い歯がこの上もなく美しかった。私の視線はその女性の顎から頚へと動き、ついにはブラウスの奥の胸の中へと侵入して止まった。次の瞬間、何を嚥下したのか、喉がゴクンと大きな音を立てた。

「何よ、この人」と急に女性の態度が変わった。
近くの乗客がその声に反応して、汚物でも見るような目で私を見咎めた。
電車が田町駅に着いてドアが開いた。
私は転がるようにして降りると、ゴミ箱に顔を突っ込んで嘔吐を繰り返した。羞かしさで顔が燃えるように熱い。もう胃の中からは何も出てこないと分かってからも、心にたまった滓(おり)を吐き出そうとして続けた。目に熱いものが溜まって溢れ出た。そのとき、背中に触れる柔かい掌を感じた。振り向こうとすると、優しい声がそれを抑えた。
「そのままでいいのよ、苦しいんでしょ？　恥ずかしいなんて思っちゃダメよ、こういうときは。わたしもいるから大丈夫……大丈夫……」
私は、「大丈夫」と小声で囁きながら背中を擦ってくれる女性の姿を想った。きっと若くて美しいに違いない。『しばらくこのままでいよう』もう周囲の目は気にならなかった。
優しさに飢えていたなどという綺麗事は言わない。私は明らかに、たまたま傍にきた女の香りに誘われて成り行きにまかせた。それ以上でもそれ以下でもなかった。心因性の身体の変調は漸く治まっていったが、それに反比例するように私の中の男が疼き始め、それを必死で糊塗しようとして顔を歪めた。
「もう少しの我慢よ、次の駅だから」
女は相変わらず優しい。左の耳に囁いている女の唇が当たったような気がした。
アパートは二階建で貸家式、造りは見るからに粗末であった。貧しい者を威圧するものが何一つない。そのことで私は真っ先に安らいだ。
女は、私を踏み込みに座らせると、窓辺に走って洗濯物を取り込み、卓袱台(ちゃぶだい)を仕舞い、布団を手際よく敷いた。よく見ると、眉が細く目が大きめで唇が薄い。決して美人ではないが、白くて綺麗な手足と相俟って曰く言いがたい魅力がある。半ば茫とし

て動き回る女を見ているうちに睡魔が襲ってきた。
何時間眠ったろう。私は、夢の中で牛乳配達用の自転車を倒し、その凄まじい音で目を覚ました。小さな冷蔵庫のコンプレッサが待っていたように動きだす。枕元の時計は九時を指していた。もちろん午前だ。カーテンの花柄が陽射しを受けて驚くほど綺麗だった。
「これでバイトもクビだな」
私は他人事のように言った。
毎朝四時に起きて二百五十本程の牛乳を配達する。私はその給与で食べ、高校に通っている。むろん配達コースや何を何本配るかは店主も知っている。配達員の退職や病気に備えてのことだが、それでも配達内容の変動を全てフォローしているわけではない。当然誤配がでる。しかも慣れないので配達時刻がいつもどおりとはいかない。いまごろは店に抗議の電話が殺到しているに違いない。中には一回の失敗で解約してくる人もいる。店主や配達仲間の怒りが目に見えるようだ。今度店に戻るときは荷物を取りに行くとき、私は自然な形でそう覚悟を決めた。
「あ、いたいた、よかった」
ドアが開くと同時に女が笑顔で言った。
「わたし、菜穂子。君は？」と、女は買物袋を置くと、目の前でブラウスを脱ぎ、スカートをスルリと足元に落とした。その動きの中に一瞬の躊いもなかった。
「馬場……馬場駿……」
私は答えながら呆気にとられた。女が下着までとって全裸になり、スッと横に座ったのだ。
乳房が違う世界のもののように揺れている。
「いくつなの」
「十九」と、女の顔に視線を移したとたん、唇が生暖かい女の唇で塞がれ、そのまま布団の上に押し倒された。
「しようね……きのう出来なかったし……」
私は女に口移しで言葉をもらった。
不潔な感じはしなかった。むしろ、小さく微笑む女

の眼差しが自分の中の汚濁を全て包んでくれているようで、心が和んだ。
この日私は、生まれて初めて女に抱かれた。感動らしきものは何もなかった。思春期からずっと心の中に描いてきた、男と女の絵図とは少し違うような気がした。ただ、成人映画やポルノ写真では取り去れなかった男としての大きな痼(しこ)りのようなものは確実に消えた。

翌朝、女が仕事に出掛けるのを待って部屋を出た。そのときちょうど隣室のドアが開いて、ゆったりめの赤いTシャツにジーンズの、化粧の派手な若い女が出てきた。私は女の視線に促される形でおずおずと会釈をした。
「二十七よ、知ってた?」と、女が唐突に言った。
私が「え?」という顔をして女の眼を直視すると、「君が寝た彼女」と、女は鼻に皺を寄せてみせた。
どうやら揶揄されているらしい。それにしてもなぜ知っているのかと、私は返す言葉を失った。
「このアパートの壁、声と音はフリーパスなの。君、女初めてだったんだ」
口調によっては腹が立ちそうな言葉だが、不思議に嫌味がない。ふと胸を見ると尖った部分がはっきりと浮き出ている。意識的なのか、女が髪を右手でいじるたびにその部分が扇情的に動いた。
「駅まで相合傘する?」
一分以上も経ってから女が言った。
そう言われて初めて小糠雨に気が付いた。
どうして断れないのかと、自分でも不思議に思う。黄色と赤のサイケデリックな柄の傘をさして、私は女と肩を並べて歩きだした。ときどき女が、車から私を護るつもりなのか、手を腰に回してくる。その仕種が遠い記憶の中にしかいない母のように優しかった。
「ねえ、わたしんちへ来ない?」と、突然女が言った。
私は驚きのあまり傘の外に弾け出た。菜穂子という

女の隣に住んでいながら、そんな発想がよく生まれるものだと呆れたのだ。恐ろしいとさえ思った。
「ウソよ、ウソ。ジョーダン」女が傘を揺らして笑いだした。
「かわいい、この子」
私と同じくらいの若い女の台詞だ。右手が自分の意志とは無関係に動き、女の頬をしたたか打った。
女が傘を手放し、二人は雨を挟んで向かい合った。私は、女の髪が濡れて白く光っていく様を、頭を空っぽにして見ていた。
どれくらい経ったろう。
「ごめん」と言って唇を噛み、女が天を仰いだ。
その真っ白い頸が綺麗だった。

私がぶったその女のアパートは別の所にあった。大田区西糀谷。羽田空港まではあと少しだという。木造モルタルの二階建だが見るからに汚かった。カラフルな洗濯物が辛うじてそれを装飾している。

菜穂子という女とこの女のつながりが分からない。そしてこの女が出てきた部屋の住人との関係も。
「気になる？　活動家なの、みんな」
訊くと女は、目の前で、おしめを変えてもらう赤ん坊のような格好でジーンズを脱ぎながら答えた。白いパンティが目に沁みるように痛い。
「はくときなら分かるけど、脱ぐときにそうするのって変じゃない？」
「柔軟体操ってとこかな」
そう言うと女は跳ね起きて、小さな流しの前に立ち、背中を向けたままTシャツの中にタオルを入れて汗を拭きだした。
昨日の菜穂子もそうだが、若い女は皆が皆、人前で平気で下着姿になり全裸になるのだろうか。私は目の前の女の引き締まった下半身に見惚れながら、本気でそんなことを考えていた。
勇気をだして疑問をぶつけてみると、女は弾けるように笑った後で、「だって狭くて隠れるとこなんかな

いじゃないの、バカね」と振り向いた。まだ笑いの余韻で肩が揺れている。

「君ってほんとに何にも知らないのね、女が狭い部屋で着替えようとしてたら、ちょっとトイレ貸してとさりげなく外すとか、後ろを向くとか、少しは神経使いなさいよ。もてないぞ、そんなじゃ」

私は大真面目に女の忠告にうなずき、遅れ馳せながら女から視線を大きく逸らした。

「そういうとこ、かわいい」

女はそう言ってから、「あっ」と慌てて口をふさいだ。またぶたれると思ったらしい。

別にずっと居てもいいと言われたわけではないのだが、行くところがない私は、ズルズルと女の部屋に居続けた。

困ったことが三つ生じた。三度三度の食事に現金がいることが一つ。牛乳屋に住み込んでいたときは、学校での弁当さえ我慢すれば朝夕食は店できちんと摂れた。働かせてもらっていることの有り難さが、こうなってみて初めて分かる。ともあれ、これから何をしていても必ずやってくる食事時間には胃袋に応えてやらなければならない。しかし、手持ちの数百円はすぐになくなり、私は美和が仕事の帰りに買ってくるパンと牛乳だけで「飢え」をしのいでいた。

美和 女の名前はひょんなことから分かった。母親から女に現金書留がきて、ちょうど部屋にいた私が受け取ったのである。私はその封筒を挿頭(かざ)しながら部屋の中をクルクルと回った。女に食わしてもらっている負い目が一瞬にして消えたと言ってもいい。『何だ、あいつ親がかりかぁ』と、心の中でホッとしたのだ。

二つ目は若い男と女が同居していれば当然起こる性の問題である。といっても、美和の欲望は外側からは分からないので明確なのは私だけ、というのが実情なのだが。美和は一人暮らしのときと同じ感覚で部屋の中に居る。また、それが出来る女だから男の私が傍で

ゴロゴロしていても気にならないのであろう。男ばかり四人が十畳間に¥ルビ（犇、ひし）めき、汗臭いばかりだった住み込み先でのこの一年。私の目は必然的に、手を伸ばせばいつでも触れられる距離で息づく美和の体に釘づけになった。勃起し続ける自分の分身を当初は恥だと思って隠そうとした私だが、美和に見つかり、「おもしろいの」と握られた後は自然な反応として気にしなくなった。美和も襲われるといった具体的な恐怖はまったく抱いていないらしい。信じているのか、なめているのか、それともまったく男と意識していないのか。菜穂子のときはあれほど簡単にできたセックスが、美和との間ではなぜか手間取った。私は、一人とり残された朝日のあたる部屋で、美和の痴態を想いながら自分で若さを処理するのを日課の一つにしていた。それは、身通しが全然たたない毎日の中で、甘美に燃焼できる唯一の時間であった。

三つ目。着替えがなかった。ない以上、洗濯して同じものを身につけるほかはない。私はほとんど下着で過ごし、外出用のものはハンガーに吊して、極力洗濯をしないでも済むように工夫した。下着なら洗っても美和の帰宅前に乾くし、季節的には全裸でも十分に体温を保つことができるからである。

しかし、こんな生活が一週間も続くと、堕落と安らぎを同視していた私もようやく落ち込んできた。

そしてまた、発作が襲った。

夕方、空きっ腹で急に胃が収縮をし始め、喉から鼻腔にかけてが苦いような酸っぱいような妙な液体に満たされたかと思うと、一気にそれが顔の表面に噴き出した。悪寒が走り、目の周りが熱くてズキズキと痛んだ。私は、流しに顔を突っ込み、タオル掛けから美和のタオルを引いて口に当てた。その後で、まるで罪でも犯したように狼狽し、狂ったようにその場でタオルを洗い出した。口と鼻からまだ何か垂れているのが見える。

「駿、何してるの。え？　どうしたの！」

美和がドアを開けるなり大声を上げた。畳の上の嘔

吐物が目に入ったのであろう。
「汚して、ごめん」水の滴り落ちているタオルを摘んだまま、振り向いた私は真っ先に謝った。
美和が私の顔を見て「ひっ」と息を呑んだ。

「おまえの分まで配らされたんだよ、一銭ももらえねえで」と牛乳屋の裏の路地で大学生の先輩店員二人が私の顔を拳で殴った。「店主(おやじ)はゆるしても俺たちはカンベンしねえからな」さらに二人は倒れた私の腹を同時に蹴り上げる。グォッと声にならない音を喉で発してアスファルトに転がる私。二人の四本の足が互いにリズム取り合うように蹴ってくる。一種自虐的な快感に酔っていた私は、彼らが微妙に加減していることにようやく気付いた。惨めさが変質し、口惜しさが何倍にもなって襲ってきた。
左目の数センチ先を足の折れた蟻が懸命に歩いている。配達と集金で一本二円の歩合、一万円はあるとふんでいた退職日までの給与は、未集金分を控除されて三千円にまで減らされた。先輩に盗られまいとしてその金を握り締めていた右の拳が、自分の姿そのままの蟻を殺すために振り下ろされた。涙が一滴、小鼻に向かって流れ落ちたような気がした。
きちんと前向きに生きなければストレスが知らず知らずのうちに自分の内面を傷つける。私の場合、心の異常は体の異常に直結する。健康のためにも現状を打破しなければならなかった。美和にも少しは食費を渡したかった。ずっと同棲するならするで、アルバイトでも何でも勤め口を探す必要があった。そのためには金が要る。正直なところ、牛乳屋には顔を出したくなかったのだが、他に当座の資金を得るあてがなかった。もう六百九十円の代価で血を売る気はさらさらない。考えてみれば、すでに働いた分の給与をもらいに行くのに何の遠慮が要るだろう。急に辞めたことは謝れば済む。私は自分にそう言い聞かせ、勇気を振り絞って行動にでた。美和のアパートを出て、駅にして四つ分も歩いて牛乳屋に行ったのも決意を強めたいから

にほかならない。しかし、そうまでして得た「成果」はあまりにも小さかった。

私は腫れあがった顔のまま、歯を食い縛り、もときた道を一銭も使わずに歩いて戻った。「一生忘れない、一生この惨めさを忘れない」呪文のようにそう唱えながら。行き交う人が私を怪訝そうに見て避(よ)けていく。心配をして声をかけてくれる者は誰もいない。大都会というところは実に有り難い所だ。「わたし、一度だって言ってないよ」

美和は、畳の上に置かれたクシャクシャの千円札を見ながら涙をこぼした。

「お金ほしいなら、君なんかと住まないってば」

そして、私に抱きつくと「バカ、バカ、バカ……」と壊れたレコードのように「バカ」を繰り返した。

私はこのとき初めて心を勃起させた。昂まりの身震いをしながらこの女が好きだと思った。　　しかし、結局この日も結ばれずに終わった。美和が目で訴えかけているのは分かったのだが、正直なところ女をどう扱うのかまったく知らなかった。菜穂子のときは、されるがままにしていればよく、私がしたことといえば男根を屹立させていたことだけであった。菜穂子は自分で私をスルリと包み込み、自分のペースで大きくうねって頂点に達した。私は抱いたのではなく、明らかに女に抱かれたのだ。目の前の美和は違う。私に抱かれようとしている。ところが、わたしにはその手順やテクニックに関する知識がなかった。それでも、頬を寄せ、唇を合わせ、髪を撫で、見詰めあって、少なくとも私にとっては充たされた時を創ることができた。

三千円を得た私だが、殴られたときにできた顔の痣(あざ)が薄くなるまで就職は無理だと、最初の面接で思い知らされた。自動車艤装(ぎそう)の期間工に応募した私に面接官は、「当社をなめてるのか、おまえは！」と怒鳴り、履歴書も見ずに封筒を投げ返してきたのである。牛乳屋の先輩大学生が、このことを予測

して私の顔に傷を付けたとしたら見事な報復というほかはない。私はまた、アパートの天井板の節を数える生活に戻った。

あれば少しは役に立ったであろう荷物も事実上放棄した格好になっている。

あのとき、店主は感情を抑え、必要な事務を流れるように進め、私の決意が固いと知ると、高校の任意退学届を書かせた。店主は入学の際、私の後見人役になっていたので、自ら学校に赴き、担任教師にきちんと説明した後で正式に提出してくるという。店さえ継がなければ学者になっていた、と近所でも評判の大学院出の店主は、私の十九歳の高校受験に好意的で叱咤激励を惜しまなかった。それだけに、入学して三ヵ月も経たないうちに挫折した私への失望感は大きかったに違いない。しかし金銭面では容赦のない人で、入学時に必要な金を借りた私は給与からぎりぎりまで差引かれ、カツカツの生活を余儀なくされた。その時の債務がまだ七千円も残っている。そこで店主は当然ながら私の居所を聞いてきた。美和の住所を言えば、保証人になれと彼女に迫りかねない怖さがこの店主にはある。私は迷ったが、あらかじめ用意していたならともかく、東京で嘘の住所など思いつく筈もなく、正直に答える羽目になった。「女、か……君がなぁ……」予想に反して店主の表情は和らいだ。

「いいだろう、この時期、君には必要なことかもしれん。学校でする勉強が全てじゃないしな。ただ、うちにいた間ずっと持ち続けてきた向学心だけは、いくつになっても忘れるな。君の場合、親に捨てられたときから人並みのレールから外れているんだから、レールに乗ってる連中に付き物の不自由さがない。時刻表もないんだから遅すぎるってこともない……」さらに店主は、独り言のように話を続けた。しかし私は、『結局口先だけの親代わりじゃねえか』と虚ろな気分で視線を漂わせていただけであった。この後で店主は精算をし、私に剥き出しで三千円を手渡すと、何を思ったか奥へ入っていった。二人の先輩に外に連れ出された

のはこのあとすぐである。そして暴行を受け、荷物どころの騒ぎではなくなった。
「もしかしたら……」店主は二人が制裁を加えることを承知していたのかもしれない。私は、胃酸が込み上げてくるのを感じて思わず両掌で口を覆った。何も出てこないのを確かめると、のそのそと体を起こして窓辺まで這った。
ハイキーな写真を見るような外の景色。太陽が元気な分、木造の低層住宅の群れが薄っぺらで今にも剥がれそうに見える。トタン板の屋根がゆらゆらと少しずつ蒸発し、家々で干している布団や洗濯物の白が膨らんで弾けかかっている。この瞬きを赦さない昼の輝きはいったい何なのか。一瞬、目の前のガラスが粉々に壊れ、破片が顔のあちこちに突き刺さったような気がした。私は指で目や鼻や口を一つ一つ確かめ、赤く染まったその指を狂ったように舐め回した。
「駿、何してるの？」
若い女の声に、はっとして振り返ると、病的に白い肌を惜し気もなく晒した美和が、男を誘う目をして下肢を大きく開いていた。近づくと遠ざかり、さらに近づくとさらに遠ざかる。やっと捉えて愛しげに触れれば、私の掌の形そのままに美和が赤く染まっていく。驚いてそれを見詰めている私の目も焼け焦げ、いつしか燃え上がって
「こんなところで寝て、暑いに決まってるじゃん。顔中玉の汗……あーあ、ちんちん丸出しで、しかもギンギンに立てちゃって」
美和の大声に、目よりも意識が先に醒めた。目蓋を開けるのが惜しいほど鮮やかな朱一色。
「早いんだな、ずいぶん」
声を出して恥ずかしさを誤魔化してみた。
「きょう、工場の機械、定期整備でね、パートやわたしみたいなバイトはハイ、ごくろーさんてわけ」
美和が正社員でないことをこのとき初めて知った。
「工場って何造ってるの？」
「お菓子、四角いビスケット。ときどきチョコレート

に回されるけど、まぁほとんど」
「いま脱いでるとこ？」
「うん、汗になったからスッポンポン」
「じゃあ、もう少し瞑ってる」
「ずいぶん紳士じゃん。いいわよ、駿なら見ても」
胸が鷲掴みされたようにキュッと締まった。
「ほんとにボクだけか」
「え？」
「……おとこ……」
私は恐る恐る目を開けて声がしていた方に顔を向けた。見えたのは、頬杖をしてニッと笑っている美和と、その後方で嬉しそうに動いている綺麗な二本の足であった。
「やいてんだ？　心配なんだ？」
美和の唇がそう言いながら迫ってきた。
ほんのり暗くなった部屋の中で私と美和は、取り込まれるのを待つ干物のように、剥かれたままで横たわっていた。繋がった指だけが辛うじて活きて動いている。汗が引いて体が少し冷えてきた。
「駿てさぁ、何をしたいわけ？」
美和が天井を向いたまま唐突に聞いてきた。
「別に……」深く考えたことはなかった。いや、考えたところで虚しいだけだと、追求すること自体を避けてきたのかも知れない。そして、しまいには考えることが恐くなった。
「夢とか目標は？　とりあえずの、でいいんだけど」
「ない……何にも」
喉に痰が詰まったような息苦しさを感じた。
「不安じゃない？　そういうのって」
「あったら、今よりもっと不安で苦しいと思う」
「なんか駿てわたしの周りの人とずいぶん違うなぁ」
「親きょうだい、と？」
「ううん、活動家や働く仲間のサークルの人達」
「……ああ」とは言ったものの、私にはどういう人達なのか皆目見当がつかなかった。なぜか、菜穂子が独

りで悦びを求め、私の上でくねくねと上体を揺らしている様が脳裏に浮かんだ。今日も美和とは結ばれなかった。触れたり舐めたり吸ったり、抱き合って戯れたり……しかしそこには、菜穂子に抱かれたときの数倍の喜びがあった。

「でもわたしね」

「え?」と、私は慌てて会話の中に引き返した。

「プチブルだなんて言って親を否定しながら、親の働いたお金で食べて遊んで、それで体制批判してる彼らって、どっか嘘っぽくて信用できないんだ」

「じゃあ、美和は自分も信用してないんだ」

「どういうこと?」

私は一瞬躊躇(ためら)った後で、「お母さんからの現金書留」と言い放った。そこには多分に嫉妬心があった。同年齢の女に厄介になっている負い目もあった。それらが、美和と自分を対等に持ち込むために採った手段が揶揄であった。

効果は絶大だった。美和がボロボロと大粒の涙を流して泣きだしたのだ。

「出てって!」

上体を起こすなり美和は、右手で握り拳をつくり、私の胸を叩いた。その勢いで飛んだのか彼女の涙が一滴、私の目に当たった。

「そんなふうにわたしを見てるんなら出てって」

二度目は落ち着いた声であった。

ただ目を丸くしてその場を動けない私に背を向けると美和は、小さな鏡台の抽斗(ひきだし)を開けると、振り向きざまに何かの束を投げてよこした。畳の上で一旦跳ねたそれは、束ねていた輪ゴムを引き千切り、カードを操る手品師にそうされたように私の目の前に広がった。その宛名の全てが女文字で同一書体であった。美和の名が綺麗に並んでいる。

「私が高校を卒業して家を出てから今までの分よ、一月三万円ずつで十五ヵ月、調べてよ、駿。わたし一回だって手を付けなかった。おなか空いてても、おしゃれしたくても、読みたい本買えなくても、大家さんに

部屋代催促されても、駿を助けたくても！……わたし絶対そのお金に手を付けなかった。なぜだか分かる？使ったら最後、自分がボロボロになって、一人で生きていけなくなるからよ。だって、楽じゃん、親にぶらさがってた方がずっとずっと楽じゃん……」

美和の白い体が自分の言葉に応えて震えていた。

いままでの印象とはまったく違った女が目の前にいる。この上もなく眩(まぶ)しかった。

ぶたれた胸がズキズキといっそう痛んだ。

美和が私に、再出発するために現金書留封筒の中の金を使えと言い出した。私はバカにされたと感じて頑なに拒んだのだが、「ママに借用書を書いて判子でも捺せば？　利息でも付ければもっと気持が楽になるかも」と美和は手品のように解決策を取り出してみせた。「親子じゃない駿ならそのお金やママと簡単に対等になれるじゃん」というのである。

私はそれでも丸一日迷った挙げ句、封筒一つ分を借りることにした。返せばいいのだ。とにかく動きがとれなければ事態は悪化するばかり、美和に負担がかかりすぎると思ったのである。

それにしても、と私は或る種の憤りを感じていた。高校の月謝が二千六百円、三年分払っても十万円に満たない。私が一と月朝の配達とその集金をして一万六千円、だから高校に三年通ったとしてその間の総収入は五十八万円弱でしかない。そう考えると美和が抽斗の中に眠らせていた四十五万という金額の意味がどれほどのものかが分かる。あるところにはある金、なくてもいいところにある金。その金のために私はどれだけ苦しんだことか。私は踵で鏡台の抽斗を蹴った。鏡が前後に揺れて私の姿を何度か隠した。

「おもちゃみたいな鏡なんか使っちゃって」

安物を大事そうに使っている、そんな美和を想い、私の気持はしだいに和らいでいった。

「ごめんください。ごめんください」

ドアの向こうで男の声がした。

『まさか美和の……』と胸がざわついた。菜穂子の隣の部屋の男かもしれない。私は美和と出会った場面を思い出しながら身構えた。返事をしていいのかどうか。修羅場になればまた、体のどこかが傷ついて職探しに支障ができる。できれば息をひそめて居留守を使いたい心境であった。

　そのとき男が声を大きくして言った。

「こちらに馬場駿君がお世話になっていると伺って来たんですが。わたくし、高校の担任の里中一弘と申します。開けていただけませんか」

　私はドアに耳を寄せて声の主を確認した。突然噴き出た汗が頬を伝い、顎の先端で躊うように止まった。